発言から

雇用・失業保障闘争の新しい拠点を全力で構築しよう

永戸第二組織部長の発言

「くもりガラスを手でふいて」

事業団をめぐってはいろいろな議論がされていますが、前提的にはっきりしておかなければならないことは、いまの全日自労の幹部にとっての選択肢は、言われているほど広くはない、ということです。

事態を幹部の主観的な願望から見るのでなく、客観的にわれわれがどこまで追いつめられているのかを、冷厳に見ることだろう。

「たら」とか「れば」――こうだったらとか、こうすれば、ということを言っていられるほど余裕のある時期に、われわれはいません。

私は、中執に選んでもらってから、二年間かけて、ほとんど全国をまわりました。その中で、事業団をやりたいけれども、できない、という県が、半数以上あります。そこに、われわれの現在の力の客観的な象徴があるのだろう。

「くもりガラスを手でふいて、あなた方に明日が見えますか」という歌がありますが、本当にくもりなく、われわれは明日を見なければいけないと思います。

広はんな失業者と連帯する道

ぼう大な仕事を求めている中高年・高齢者がいる中で、たんに失対の六十五歳線引き反対、死ぬまで働かせてくれということだけで、一体通るだろうか。

じゃあ、仕事がなくて困っている人たちと共通の目標を提示して、本当にわれわれが連帯の握手ができる武器は何なのか。私は事業団しかないと思います。

東葛事業団など、全日自労のまったくなかったところで、組合員が二十人、三十人とふえています。この人たちが、半年もたたないうちに、自分たちと同じような、仕事を求めている人たちを何とかしようと、事業団の賛同書を持って、地域をまわっているんですね。そういう状況を全国各地につくったときに、われわれは本当の新しい力を獲得したことになるのではないか。

失対内外むすぶ失業保障の拠点

事業団を中心にすえることは、失対を見すてることだとかいうわけでしょう――そこに答が出ていると思います。

私たちは、事業団で「第二失対」をつくろうと言っているんですよ。その第二失対は、本当に民革労事業の要求を放棄することに等しいとか、事業団では失対のなかまを守れない、などの意見があります。

失対のなかまを守れるということは、大宮の発言で明確になったと思います。

公的就労事業、失対再確立の問題では労働省や自治体が事業団は第二失対になるからいやだと言っているとか、いろいろ言われますが、何千万という安定就労者や、明日は首をつろうとか、一家で逃げ出そうか、という人たちを助けることができるのは、この全日自労をおいて他にはないという思いを強くしています。

だから、いま、ぼくは、ぼくらの世代やそれ以下の連中にたとえ給料が下がっても全日自労に来てて力を出せ、と言って連れてきます。

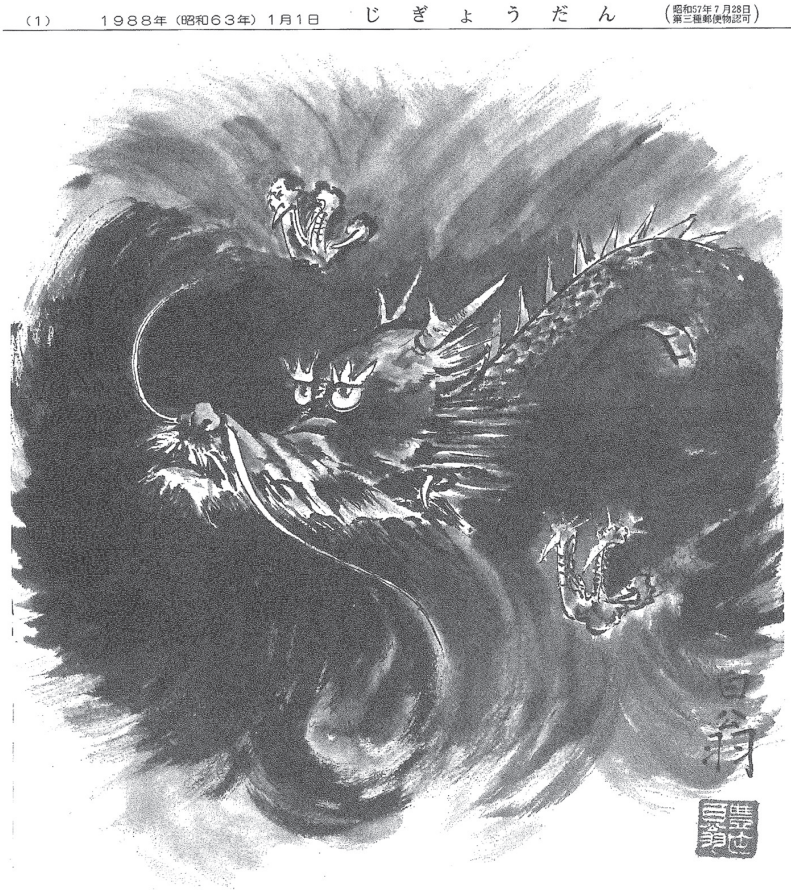
東葛をテコにして、全国に三十人くらいの若い人が訓練をうけて、いま全国でがんばっています。本部でも全日自労から給与を保障されているのは二人で、事業団独自に、すでに四～五人の事務局員がいます。それ以外に、直轄事業や何かで、二十人ぐらいの事務局員扱いの人間が、がんばっています。これからも、百名、百五十名という若い人材を、何とかして養成するつもりです。

これまで全日自労がはたしてきた役割とその目的、そして軍拡臨調の嵐の中でなぜ全日自労が生きのこなければならないのかを訴えたら、手弁当でもはせ参じてくれる人は多いはずです。その訴えができるからこそ、私は全日自労は強いと思いますし、そこに事業団の構想をすえていただきたいということを最後にして発言を終わります。

全日自労の旗を守りぬく

いま私は全日自労に入って六年になりますが、本当にくもりなく困っている人たちと共通の目標を提示して、本当にわれわれが連帯の握手ができる武器は何なのか。私は事業団しかないと思います。

全日自労大会での発言。「くもりガラスを手でふいて明日が見えるか」と挑発したと批判もされた



豊田　尚三（センター事業団・みさと事業所）

人類の大道を行け

暗黒の世界の中で
未来への光明を見いだすことはむつかしい
混とんの社会の中に
新しい社会への出口を見いだすことも
やさしいことではない
人類はしかし、ここまで生きつづけてきた
絶望もし、傷つきもし、想い半ばで倒れた人の
意志もふくめて
人類は今日の文明をつくりあげてきた
人間として、同じ人間がつくりだしたとは思えない
おぞましい遺産を前に
希望を失い背筋にはりつく恐怖を多くの人はもつ
核戦争――人類絶滅の危機
恐怖からの解放
絶望からの脱却
そして社会進歩と全人類の幸福へ
一歩をふみだしたい
眼を激しい意志をこめてシッカと開け
悠久の未来を見つめよ
心を限りなく人の生きざまに
生あるものに向け
愛をこめよ
夢と熱情とそして強じんな意志と！
それが21世紀への人類の希望をつくりだす
龍よ翔べ！
いざわれらは
労働者協同組合の船をこぎださん
その帆に新しい時代への意志をこめて

古家　卓

労協新聞新年号には、編集部からの求めに応じてペンネームで詩を書いた

全国協同集会成功へ

10月7、8日、滋賀県で全国協同集会が開かれる。2020年までの3年間が「戦後総決算の時期になる」と話したが、その船出として、協同集会までの3カ月、あらゆる地域で地域の真の発展の序曲をつくり上げてほしい。その序曲を持ち寄って、いわばコンサートのような全国協同集会にしたい。その「コンサート」は、安倍政権のやり方に対する徹底的な反撃の狼煙ともなるだろう。

滋賀に集った全国の仲間が、本格的な地域づくりの礎となり、協同労働を手に、よい仕事を考え、創意工夫して新たな地域づくりへとなっていくだろう。

感性豊かなリーダーに

私は本総会で退任。連合会、センター事業団とも新たな体制になる。組合員、とりわけリーダーには、事業能力、経営能力、運動を組織する能力など、さまざまな能力が求められるが、その基礎は感性ではないか。感性がどうしたら鋭くなるのかは分からないが、いよいよ飛躍しようというときを迎え、感性豊かなリーダーになってほしい。

人間味あふれる組合員に

連合会理事長としての最後のメッセージを、新しいリーダーたちに心より贈りたい。

人は変わる。人は変われるものだ。つまり、人には無限の力がある。このことを確信として、自分たちの取り組みの前提に置き続けてほしい。

そして、自分たちが社会に新しい風を巻き起こす存在になるつもりなら、一つひとつの取り組みに、自分の目一杯の愛情を注いでほしい。それは、自分が感性豊かな、人間味あふれるワーカーズの組合員になりきることではないか。

つまり、協同労働運動の最終的なあり方を決めるのは自分自身の心だ。自分自身の心を鍛えることが最大のテーマだ。

ワーカーズコープの真の組合員は、社会の真の変革者である。社会の変革者とは、社会が行き詰まっているところに新しい道をつける存在である。その取り組みの中でこそ、人間として鍛えられる。

何ものも恐れず、怯えず、決して奢らず、勇気をもって生き抜く覚悟を固め、心からの愛を込めて、明日からの取り組みに立ち上がっていただきたい。